

高清水町文化財調査報告書第3集

仰ヶ返り地蔵前遺跡 高清水城跡

平成14年3月

高清水町教育委員会

仰ヶ返り地蔵前遺跡
高 清 水 城 跡

序 文

高清水町は、豊かな自然と風光明媚な景観を持ち、私たちの祖先が残した数多くの文化遺産に恵まれております。この文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造され、育まれてきたものであります。

平成10年3月 高清水町文化財報告書第1集「高清水城跡」が刊行され、さらに平成12年3月第2集「経ヶ崎遺跡・観音沢遺跡」が刊行されております。

本書第3集は仰ヶ返り地蔵前遺跡・高清水城跡の2遺跡でおこなった発掘調査の報告書であります。

仰ヶ返り地蔵前遺跡や高清水城跡から発見された出土遺物・遺構から私たちの先人の技術と知恵の結晶であり生活の証となる文化遺産を引継ぐことができました。

私たちの先人の幾多の苦難を乗り越え、悠久の歴史を築き上げた血と涙の結晶である文化財の保存と保護が、本町の続く限り後世に伝わることを祈念しております。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書を刊行するにあたり、多大なるご指導、ご尽力を賜りました宮城県文化財保護課の皆様方をはじめ、地域関係各位のご協力、ご支援に深甚なる感謝の意を表し、今後、ますますのご指導、ご協力を賜りますことをお願い致し、発行のあいさつといたします。

平成14年3月

高清水町教育委員会

教育長 高 橋 紀 子

目 次

はじめに.....	1
I 仰ヶ返り地蔵前遺跡	
1. 調査成果.....	3
2. まとめ.....	13
II 高清水城跡	
1. 調査成果.....	15
2. まとめ.....	20

写真図版

例 言

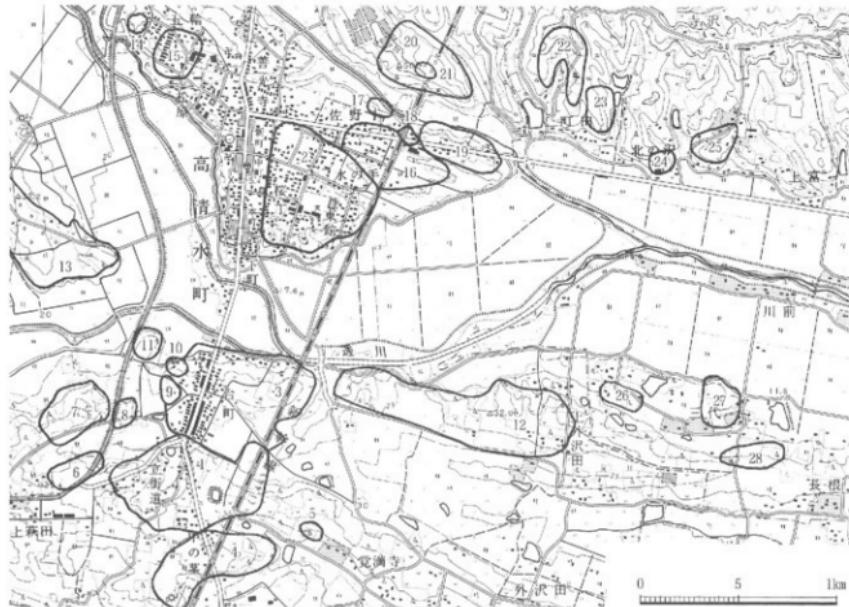
1. 本書は、宮城県栗原郡高清水町に所在する、仰ヶ返り地蔵前遺跡、高清水城跡の2遺跡でおこなった発掘調査の報告書である。
2. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の協議を経て古川一明がおこなった。
3. 本書における土色の記述には「新版標準土色帳（1973）」を使用した。
4. 本書の第1図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「高清水」を複製して使用した。
5. 遺構の略号は次の通りで、2桁の通し番号で各遺構に付した。
S A : 柱列、S B : 植立柱建物跡、S D : 溝跡、S E : 井戸跡、S K : 竪穴遺構
6. 本書における平面直角座標は国家座標第X系に基づいている。
7. 仰ヶ返り地蔵前遺跡出土の中世瓦、瓦窯跡、奥大道、覚満寺関係について藤原二郎氏より多くの情報提供を受け、類例についてのご指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表す。
8. 高清水城跡から出土した木樋・板の一部の保存処理は、東北歴史博物館副主任研究員の及川規氏に依頼した。
9. 調査の記録や整理に関する資料および出土品は、高清水町教育委員会が一括して保管している。

はじめに

仰ヶ返り地蔵前遺跡・高清水城跡は、宮城県北部の栗原郡高清水町に所在する中世・近世の遺跡である。町役場からみると、仰ヶ返り地蔵前遺跡は南南東約2kmに、高清水城跡は南東約600mにそれぞれ位置している。

地形

高清水町の地形をみると、本町は奥羽山脈から派生する築館丘陵の末端部にあたり、町域での丘陵の標高は60m~20mで、東へとなだらかに傾斜し、やがて蕉栗沼のある低地へと移行している。丘陵部の末端は、迫川の支流である善光寺川、小山田川、透川によって樹枝状に開析され、町域はこれらの河川によって四分されている。高清水城跡は、善光寺川と小山田川の間の丘陵地の末端部に立地し、



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	仰ヶ返り地蔵前遺跡	古代	11	透川遺跡	古代	21	下日木遺跡	平安
2	高清水城跡	中世	12	外沢田遺跡	古代	22	渡戸坂遺跡	飛鳥・古墳
3	賀茂古道跡	縄文・古墳・奈良・中世	13	猪ヶ崎遺跡	縄文・古墳・古墳・古代	23	日出遺跡	六代
4	中ノ森遺跡	縄文・古代・中世	14	五輪山遺跡	古代	24	北ノ沢遺跡	古代
5	豆南古跡	中世・近世	15	五輪山遺跡	縄文・古墳	25	守山遺跡	縄文
6	地ノ木塚山古道跡	縄文・古代・中世	16	東浦遺跡	弥生～平安	26	一ノ代遺跡	古代
7	右側古道跡	古代	17	下佐押遺跡	古代	27	三代遺跡	古代
8	向野人遺跡	縄文・古代・中世	18	猪の池遺跡	古代	28	三塙遺跡	古墳？・古代
9	勘ノ木塚山古道跡	古代	19	大赤嶺跡	縄文早・古墳・古代			
10	向野古道跡	古代	20	猪庄遺跡(前城館)	平安・中世			

第1図 遺跡位置図

仰ヶ返り地蔵前遺跡はその最南部の丘陵地に立地している。

土地の利用状況をみると、善光寺川、小山田川、透川の各河川の流域には狹隘な沖積地が形成され、これらの沖積地が水田として利用されている。一方、丘陵地は主に畠地や住宅地として利用され、高清水城跡は高清水中学校の敷地を中心として公園・住宅地、仰ヶ返り地蔵前遺跡周辺は畠地・住宅地となっている。

歴史的環境

高清水町内には多数の遺跡が所在する。そのうち、両遺跡に関わる中・近世の遺跡についてみてみる。

まず、城館跡としては新庄館跡、陣館館跡、運難館跡がある。新庄館跡は、善光寺川北岸の丘陵上に立地する館跡で、昭和49年に東北新幹線建設工事に関わる発掘調査がおこなわれ、通路状遺構・段状遺構が発見された（宮城県教育委員会：1980）。伝承では室町初期より新庄伊賀守が居住したとされているがそれを裏付ける資料はない。陣館館跡、運難館跡は小山田川上流の南北岸に対峙するように立地する。それぞれ中・近世の城館跡とされるが、いずれも発掘資料はなく言い伝えが残るのみであり、詳細は不明である。

次に城館以外の中・近世の主な遺跡として観満寺跡、観音沢遺跡、東館遺跡などがある。観満寺は中世の寺院跡とされる遺跡で、平成8年に観満寺跡発掘調査団による学術調査がおこなわれ、埋葬施設とみられる竖穴遺構、溝跡などが発見され、中世陶器、骨片などが出土した。中世寺院の遺構は確認されていないが、遺跡の一画には鎌倉時代後期、13世紀後半以降の板碑が18基確認されていて、この地が葬送の場であったことが確認されている（観満寺跡発掘調査団：1999）。観音沢遺跡は昭和51年～54年に東北新幹線建設工事に関わる発掘調査がおこなわれ、鎌倉時代後半から室町時代前半の掘立柱建物跡、窓穴遺構、井戸跡などの遺構が発見され陶磁器その他の遺物が出土した（宮城県教育委員会：1980）。東館遺跡は高清水城跡の東に隣接する遺跡で、昭和51年の調査で高清水城跡の外堀に連接するとみられる溝跡が発見されている（宮城県教育委員会：1980）。この他、松ノ木沢田A遺跡・向野A遺跡では、国道4号線の高清水バイパス建設工事に関わる調査で溝跡が発見され中世陶器が出土している（宮城県教育委員会：1981）。また、時期は不明であるが大規模な土壙を伴う「牧堀」の遺構が確認されている。

参考文献

- 高清水町史編纂委員会：1976：『高清水町史』
高橋道男：1980：「東館遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書⑬」
宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
高橋守克：1980：「新庄館跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書⑭」
宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
千葉宗久：1981：「松ノ木沢田遺跡・向野A遺跡」「東北地連バイパス関係遺跡調査報告書」
宮城県文化財調査報告書第76集 宮城県教育委員会
観満寺跡発掘調査団：1999：『観満寺跡発掘調査概報』
宮城考古学第1号 宮城県考古学会

I 仰ヶ返り地蔵前遺跡

調査要項

仰ヶ返り地蔵前遺跡

遺跡名：のけがえりじぞうまえいせき（宮城県遺跡登録番号44005）

遺跡記号：T F

所 在 地：宮城県栗原郡高清水町字仰ヶ返り

調査原因：町道覚満寺線改良工事

発掘面積：約300m²

調査期間：第1次調査（確認調査）平成8年10月16日

第2次調査（事前調査）平成12年11月20日～12月8日

調査員：第1次調査（確認調査）

真山悟・後藤秀一・古川一明（宮城県文化財保護課）

第2次調査（事前調査）

櫻田逸子（高清水町史編纂事務局）

山田晃弘・古川一明（宮城県文化財保護課）

I 仰ヶ返り地蔵前遺跡

1. 調査に至る経過

これまでの調査

昭和51年、今回の調査地点の東約30mの地点で、東北新幹線建設工事に関わる発掘調査がおこなわれ、古代・中世の遺構が発見され中世の瓦などが出土した。この調査がおこなわれた時点で「仰ヶ返り地蔵前遺跡」は未登録であったため、当地点の南側に隣接しすでに周知されていた「中ノ墓遺跡」の一部であるとの認識に基づき「中ノ墓D遺跡」という遺跡名で調査・報告がなされた（宮城県教育委員会：1980）。

ところがその後、宮城県遺跡地図改訂の際、「中ノ墓D遺跡」の範囲について、当地点が地形的に「中ノ墓遺跡」とは低地を挟んで分断されているとの認識から、新たに「仰ヶ返り地蔵前遺跡」という遺跡名が付けられ、独立した遺跡として登録された（宮城県教育委員会：1988）。したがって、既に宮城県文化財調査報告書第65集（同上）に報告されている「中ノ墓D遺跡」は、「仰ヶ返り地蔵前遺跡」の一部ということになり、遺跡範囲は第1図のようになる。

遺跡の概要

仰ヶ返り地蔵前遺跡のほぼ中央には、遺跡名の起源となった「仰ヶ返り地蔵」が祀られている。「仰ヶ返り地蔵」は高さ約2.5m、幅約2mの多孔質の石材に、像高約1.5mの地蔵尊の座像を半浮き彫りにしたもので、錫杖を右肩から左膝内側に携えた姿である。ただし、表面の風化は著しく、目や口、手足などの細部の表現は明確でない。現状では名前の如く、仰向けに転んだ状態で、頭部を南東に向け、やや北側に傾いている。この地蔵尊は今でも信仰の対象となっていて、首には赤い布が巻かれ、上部には木製の覆い屋が建てられている。

地蔵尊の制作年代・由来は不明であるが、宝曆13年（1763年）から明和9年（1772年）にかけて編纂された仙台藩「封内風上記 卷十八」の栗原莊高清水邑の条には「仰倒（のけかへり）地蔵」との記述が見られることから、江戸時代中頃にはすでに現在の状態になって祀られていたことがわかる。

ところで、地蔵尊のある場所は、南北約10m、東西約8mの長方形で、高さが約70cmの土壇状になっている。この土壇の東側には「東街道（あずまかいどう）」との言い伝えが残る農道が南北に走っている（高清水町史編纂委員会：1976）。中世の街道であるならば「奥大道（おくたいどう）」と呼ぶべきものであろうが、ともあれこの農道が中世の幹線道路の痕跡とみられている。今回の調査区は、「仰ヶ返り地蔵」が祀られた土壇の10mほど南側に位置し、この農道部分の南端も調査対象範囲内に入っている。

また、今回の調査では中世の瓦が少量出土しているが、当遺跡内では、中ノ墓D遺跡で平瓦が出土しているほかに、各所で中世陶磁器や中世の瓦類が表面採集されている。とくに、遺跡西側の水田区画整理工事が行われた際、当遺跡を踏査した藤原二郎氏によって、軒瓦を含む瓦類が採集され、中世の瓦窯とみられる遺構の一部も確認されている。当遺跡の東約500mの同一丘陵上には中世の寺院跡と

いわれる覚満寺跡があり、ここでも同様の中世の瓦類が採取されていることから、当遺跡内もしくは周辺に中世の寺院やそれに関連した施設が存在したと考えることができる。

調査経過と方法

平成8年、本遺跡内を通過する町道覚満寺線の改良計画が起案されたため、高清水町建設課、町教育委員会、宮城県文化財保護課の三者が協議して、確認調査を実施することにした。確認調査は現道両側の拡幅予定部分に任意のトレーニングを設定して掘り下げ遺構・遺物の有無を確認した。その結果、道路センターNo.5～No.6の区間で遺構が発見され、工事に先立って本調査が必要であると判断された。このため、この区間の工事を延期し、本調査の時期を待った。

本調査は、平成12年に町教育委員会が主体となり、県文化財保護課の協力を得て実施した。調査区は道路センターNo.5～No.6の区間で、長さが約45m、幅は現道下部とその両側の拡幅部を含む約7mである。調査の結果、柱穴、井戸跡、竪穴遺構などが検出され、中世瓦、陶磁器類、釘などが出土した。発見された遺構および調査区については、道路幅を基準とする任意の方向の3×3グリッド方眼を調査区内に設定し、縮尺1/20の平面図・断面図を作成した。また、遺跡の記録写真は35mm黑白・カラースライドで撮影した。



第2図 調査区平面図

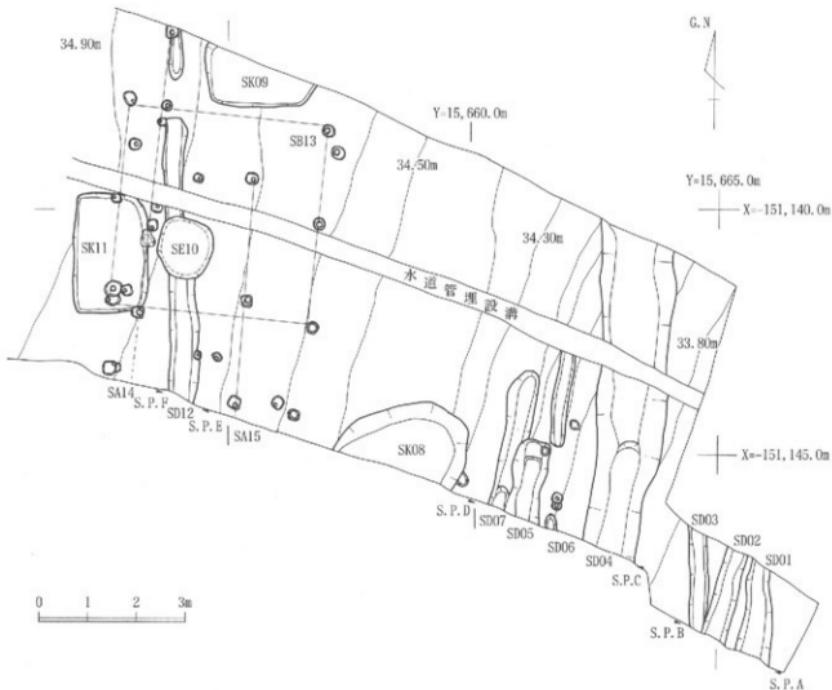
2. 調査成果

発見された遺構と出土遺物

調査区内の地形は、北西から南東へゆるやかに傾斜している。発見された遺構は、溝跡8条、竪穴遺構3基、井戸跡1基、掘立柱建物跡1棟、柱列2条などで、いずれも傾斜がやや急になる東半部で検出された。この他に組み合わない柱穴がいくつかある。これらの遺構は調査区東半部に偏在し、それぞれの軸方向が真南北方向であることなどから、遺構の配置には地形の傾斜とは異なり方位を意識した強い規則性がみられる。

これらの遺構の検出面はいずれも黄褐色のローム層上面である。遺構の残存状態は全体的に悪く、特に柱穴は深いものでも30cm足らずで、上部はかなり削平されたものと推定される。なお、調査区東端の北側半分は水道管の分岐弁が埋設されていたために調査できなかった。

出土遺物は、SD04・05溝跡、SK08・09竪穴遺構から平箱半箱分の遺物が出土している。遺物の内容については、以下の各遺構の項で記述する。



第3図 遺構分布図

溝跡

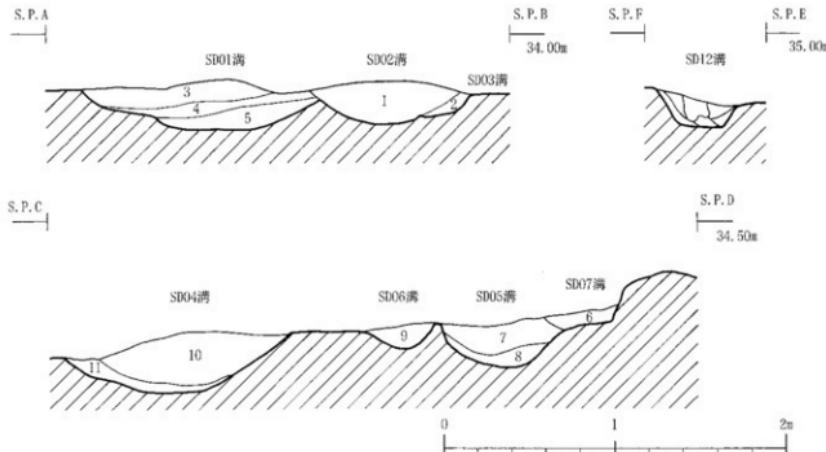
発見された8条の溝跡はいずれも南北方向でほぼ並行している。このうちSD01～07の7条の溝跡は、調査区の東端部で検出された。これらは重複するものが多く、各々の溝跡に掘り直しのみられるものがあることから、同じ場所で同じ方向の溝を何度も改修した状況がうかがえる。

[SD01溝跡] 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。SD02溝跡と重複しこれよりも古い。上幅150cm前後、確認面からの深さ約30cmで、壁はごく緩やかに立ち上がり底面は平坦である。東側の壁の途中に掘り直しによるとみられる段がある。掘り直し後の底面堆積層は砂質の水成堆積層である。

[SD02溝跡] 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。SD01・03溝跡と重複しこれらの中でもっとも新しい。上幅90cm前後、確認面からの深さ約30cmで、壁は緩やかに立ち上がり底面は平坦である。

[SD03溝跡] 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。SD02溝跡と重複しこれより古い。上幅50cm前後、確認面からの深さ約20cmで、壁はごく緩やかに立ち上がり底面は平坦である。

[SD04溝跡] 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。上幅150cm前後、確認面からの深さ約40cmで、丸みのある底面から壁が緩やかに立ち上がる。西側の壁の途中に掘り直しによるとみられる段がある。堆積土から、古瀬戸瓶子（第7図1）、中世陶器大甕（第7図2・3）、平瓦（第7図4）、驥羽口などの破片の他、鉄滓が出土している。



No.	溝跡	土色	土性	備考
1	SD02溝跡	黒褐色	7.5YR3/1	粘質シルト ローム混含
2	SD03溝跡	にじむ黄褐色	10Y5/4	"
3	SD01溝跡	褐色	7.5Y4/3	"
4	"	暗褐色	7.5YR3/4	シルト質砂質 水性堆積
5	"	褐色	10YR4/4	シルト質粘土 ローム混含

No.	溝跡	土色	土性	備考
6	SD07溝跡	黒褐色	10Y5/2	シルト ローム混含
7	SD05溝跡	黒褐色	10Y5/2/1	"
8	"	褐色	10Y4/2/2	粘質シルト
9	SD08溝跡	褐色	7.5YR4/3	"
10	SD04溝跡	黒褐色	10YR3/2	シルト ローム混含
11	"	灰褐色	10YR6/2	砂質シルト

第4図 溝跡断面図

【SD05溝跡】 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。SD07溝跡と重複しこれより古い。南半のみで途切れ、壁が急に立ち上がるから北側には延びないものとみられる。上幅80cm前後、確認面からの深さ約30cmで、平坦な底面から壁は急に立ち上がる。堆積土から平瓦（第7図5）、鶴羽口などの破片の他、鉄洋が出土している。

【SD06溝跡】 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。南側に途切れ途切れにしか残っていないが、北側にも延びていたものとみられる。上幅40cm前後、確認面からの深さ約15cmで、丸みのある底面から壁は急に立ち上がる。

【SD07溝跡】 調査区東端で検出された南北方向の溝跡である。南側のみで途切れていますが、北側にも延びていたものとみられる。SD05溝跡と重複しこれより新しい。上幅50cm前後、確認面からの深さ約15cmで、平坦な底面から壁は急に立ち上がる。

【SD12溝跡】 調査区中央で検出された南北方向の溝跡である。北側で一旦途切れていますが、一連の溝であったとみられる。SE10井戸跡、SB13掘立柱建物跡、SA15柱列、柱穴と重複しこれらよりも古い。上幅50cm前後、確認面からの深さ約20cmで、平坦な底面から壁は急に立ち上がる。

井戸跡・竪穴遺構

井戸跡、竪穴遺構は、溝跡群の西側に位置し、調査区の中央部で検出された。

【SK08竪穴遺構】 調査区中央南端で検出された竪穴遺構である。南半分が調査区外にあり全体形は不明である。確認面からの深さ約60cmで、平坦な底面から壁は急に立ち上がる。堆積土は上部が自然堆積で、下層は人為的に埋め戻されている。上層の自然堆積層から、中世陶器擂鉢（第7図6）、古瀬戸、常滑の大堀の体部破片を転用した砥石（第7図7）などが出土している。

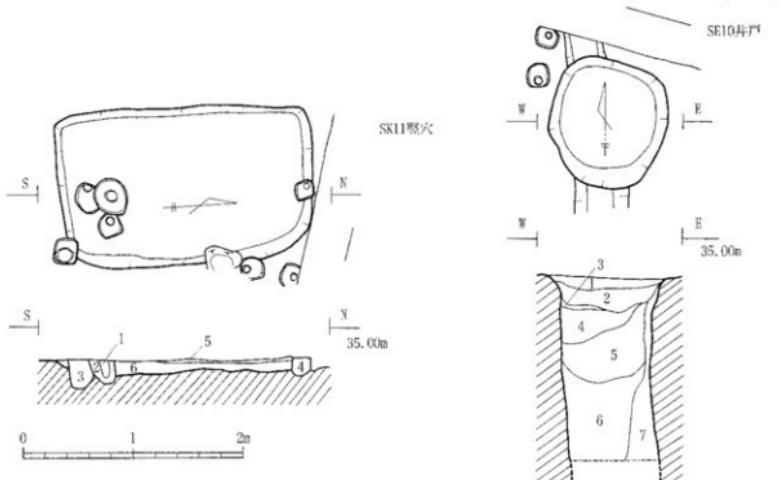
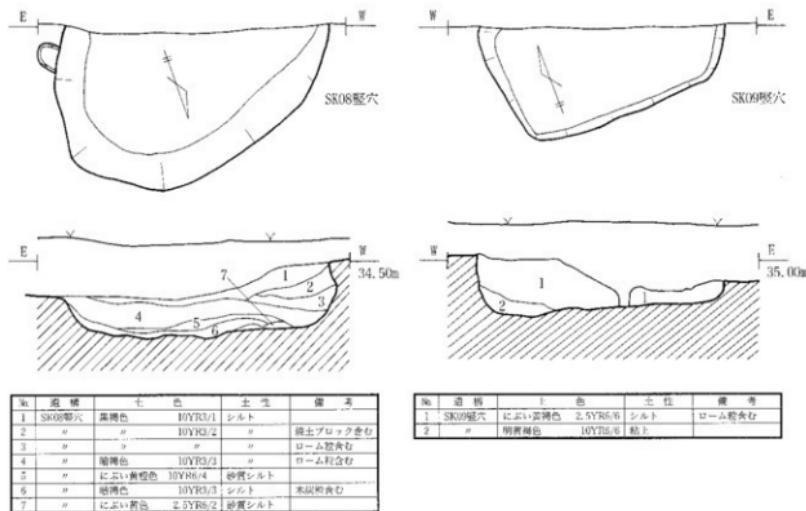
【SK09竪穴遺構】 調査区中央北端で検出された竪穴遺構である。北半分が調査区外に延びており平面形は東西220cm、南北130cmの長方形を呈するとみられる。確認面からの深さ約60cmで、平坦な底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は人為的に埋め戻されたもので地山ブロックが多量に混じる。堆積土から砥石（第7図8）が出土している。

【SE10井戸跡】 調査区中央で検出された素掘りの井戸跡である。SD12溝跡、SB13掘立柱建物跡と重複しSD12溝跡よりも新しい。平面形は径80cmの隅丸方形を呈する。確認面からの深さ約180cm以上で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。下部の堆積層は崩落の危険性があったため調査できなかった。堆積土は人為的に一気に埋め戻されたものである。

【SK11竪穴遺構】 調査区中央南よりで検出された竪穴遺構である。SB13掘立柱建物跡、SA15柱列と重複しこれらよりも古い。平面形は東西150cm、南北240cmの長方形を呈する。確認面からの深さ約15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は上部が自然堆積であるが、下層は人為的に埋め戻されたものである。

掘立柱建物跡・柱列

【SB13掘立柱建物跡】 調査区中央で検出された南北棟の建物跡である。身舎が南北桁行2間、東西梁行1間で西側に庇もしくは縁とみられる出が1間付く。SE10井戸跡、SK11竪穴遺構、SD12溝跡、SA14・15柱列と重複し、SK11よりも新しい。検出した9個の柱穴のうち、5カ所で柱痕跡を確認し、4カ所



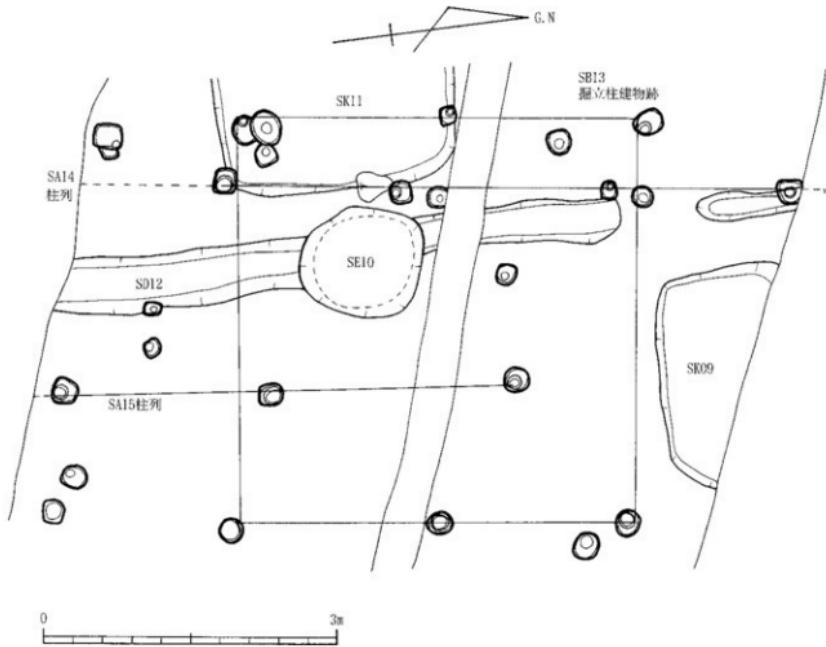
No.	地質	土色	土性	備考	
1	柱穴	黒褐色	10YR3/1	シルト	柱孔跡
2	"	"	10YR3/2	"	
3	SE10 井戸穴	黒褐色	10YR3/1	"	水没合む
4	"	灰褐色	10YR4/2	"	ローム粘合む
5	SK11 穴	"	"	"	
6	"	"	"	"	
7	"	黒褐色	10YR2/1	シルト	ローム粘合む

第5図 井戸跡・竪穴遺構

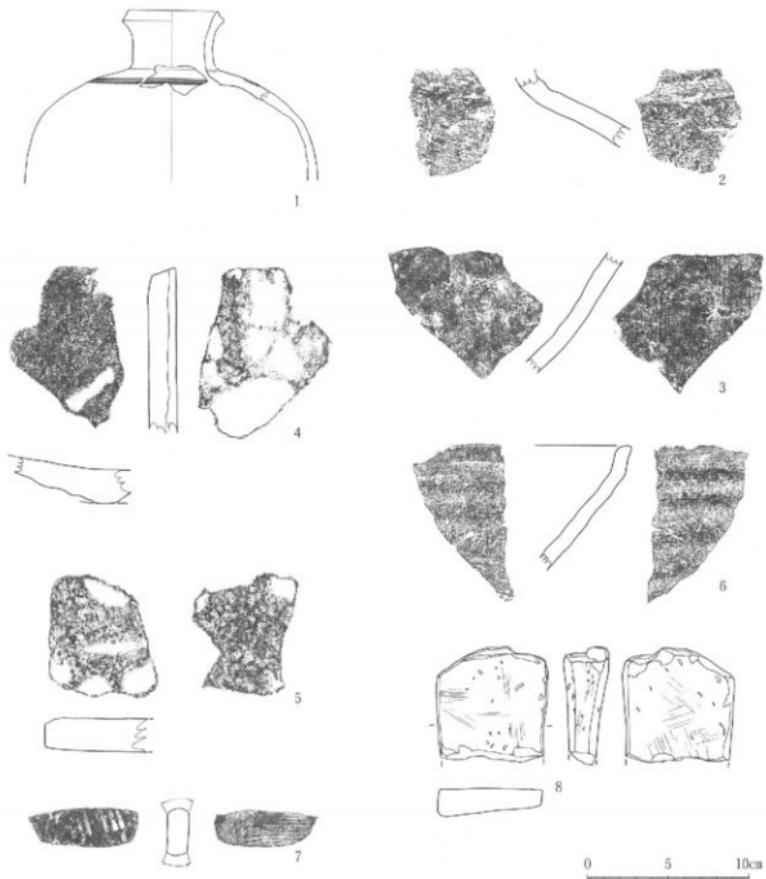
で柱の抜取痕跡を確認した。柱穴掘り方は平面形が径25~30cmの円形もしくは隅丸方形で、深さは20cm前後、柱痕跡は直径10cm前後である。桁行総長は西側柱列で4.1m、柱間寸法は南から2.1m、1.9mである。梁行総長は3.3mで、西側の庇もしくは縁の出は0.7mである。建物の方向は桁行がSD04~07溝跡の方向とほぼ一致する。

[SA14柱列] 調査区中央で検出された南北方向の柱列である。調査区内で2間分ありさらに南北の調査区外に延びる可能性がある。SB13掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。検出した3個の柱穴のうち、2カ所で柱痕跡を確認し、1カ所で柱の抜取痕跡を確認した。柱穴掘り方は平面形が径25~30cmの円形もしくは隅丸方形で、深さは20cm前後、柱痕跡は直径10cm前後である。柱間寸法は南から2.3m、2.2mである。方向はSD04~07溝跡やSK11竪穴遺構の軸線方向とほぼ一致する。

[SA15柱列] 調査区中央で検出された南北方向の柱列である。調査区内で3間分ありさらに南北の調査区外に延びる可能性がある。SK11竪穴遺構、SD12溝跡、SB13掘立柱建物跡と重複し、SK11竪穴遺構、SD12溝跡よりも新しい。検出した4個の柱穴のうち、3カ所で柱痕跡を確認し、1カ所で柱の抜取痕跡を確認した。柱穴掘り方は平面形が一辺25cmの隅丸方形で、深さは20cm前後、柱痕跡は直径10cm前後である。柱間寸法は南から2.3m、2.2mである。方向はSD04~07溝跡やSK11竪穴遺構の軸線方向とほぼ一致する。



第6図 掘立柱建物跡・柱列



施	所	固	相	種	出土遺物	特	無	生産地
1	古墳戸	原子	SD04	周部に4枚の沈縫。淡黄色地				瀬戸
2	竹筒陶器	裏	SD04	外側に薄板による自然縫。胎土赤褐色。石英斑を含む	在地			
3	ノ	ノ	SD04	内側に薄板による自然縫。胎土灰緑色。胎土は緻密	常滑			
4	丸	平底	SD04					
5	ノ	ノ	SD02					
6	中三井窯	處引鉢	SK08	胎土赤褐色				在地
7	中三井窯	燒石	SK08	外側に厚板、薄灰による褐色の自然縫				常滑
8	石器類	焼石	SK09	薄灰均質				

第7図 出土遺物

出土遺物

遺物が出土した遺構は、SD04・05溝跡、SK08・09竪穴遺構である。

【SD04溝跡出土遺物】

第7図1：古瀬戸瓶子の頸部から肩部にかけての小破片である。肩部外面に4条1単位の沈線がめぐり、内面は指頭による強いナデの痕が残る。古瀬戸編年研究によれば、肩部に沈線がめぐる瓶子は、前田期～前IV期で、年代的には13世紀後半に位置づけられる（注）。

第7図2・3：中世陶器大甕の破片で、2は頸部から肩部にかけての破片、3は体部下部の破片である。胎土・焼成からみて、2は在地産、3は常滑産とみられる。

第7図4：平瓦の破片である。斜めに削ぎ落とされた端部が確認できるが、小破片であるため、これが広端か、狭端かは不明である。二次的に火を受け全体が肌色に変色しもろくなつていて表面の風化・剥落が著しく、整形痕などは確認できない。

【SK05溝跡出土遺物】

第7図5：平瓦の破片である。斜めに削ぎ落とされた端部が確認できる。やはり二次的に火を受け全体が肌色に変色し表面の風化・剥落が著しく整形痕などは確認できない。

【SK08竪穴遺構出土遺物】

第7図6：中世陶器擂鉢の口縁部破片である。内面は使用により摩滅しており、おろし目はない。胎土・焼成からみて在地産とみられる。器形やおろし目がないなどの特徴からおおむね13世紀後半～14世紀前半の年代が想定される。

第7図7：中世陶器大甕の体部破片を砥石として転用したもので、周縁部が著しく摩滅している。胎土・焼成からみて常滑産とみられる。

【SK09竪穴遺構出土遺物】

第7図8：凝灰岩製の砥石で、四面が使用されている。

注：瀬戸市埋蔵文化財センター：1997：「（付録1）第1表 古瀬戸編年表(I)」

『研究紀要』第5輯 財團法人 瀬戸市埋蔵文化財センター

3.まとめ

発見された遺構は、溝跡8条、竪穴遺構3基、井戸跡1基、掘立柱建物跡1棟、柱列2条で、他に組み合わない柱穴がいくつもある。

遺構の年代

まずこれらの遺構の年代についてみると、SD04溝跡、SK08竪穴遺構から、13世紀後半～14世紀前半の陶磁器類が出土していることから、鎌倉時代後半頃のものと考えられる。その他については出土遺物がないため特定できないが、近世の遺物がないことや、各遺構の方向がSD04溝跡とほぼ同じであることなどからみて、これらも前後するほぼ同様の年代の遺構群と考えられる。

遺構の性格

次に、各遺構の性格について検討してみたい。まず、調査区東側に集中する南北方向のSD01～07溝跡については、SD07溝跡から東側に竪穴遺構、井戸跡、掘立柱建物跡が確認されないことから、この部分が道路跡の道路敷の一部である可能性を想定しておきたい。その場合、SD01～07溝跡は時期の異なる道路の西側側溝であると考えることができる。当遺跡の歴史地理的位置と、ほぼ同一地点で側溝の改修が繰り返されているという現象を考えあわせるなら、一時的なものではなく、長期にわたって維持された道路跡と考えることができ、鎌倉時代後半期の幹線道路であった「奥人道」である可能性も否定できない。ただし、SD07溝跡から東側が削平され遺構が失われた可能性もあることから、この部分を道路跡と認定するにはなお根拠が希薄である。今後の周辺地域での調査成果の蓄積が期待される。

次に、これらの道路側溝に沿うように分布する遺構群については、道路に向した集落もしくは施設の一部と考えられる。内容的には竪穴遺構、井戸跡、掘立柱建物跡などで構成される点で、当遺跡の北側に隣接する觀音沢遺跡にはほぼ共通した内容である。輪の羽口や鉄滓が出土していることから、周辺に鍛冶関連施設も存在したものとみられる。

遺跡の構成

今回の調査は当遺跡の中では部分的なものではあったが、仰ヶ返り地蔵に近接した地点の調査であったこと、道路側溝とみられる溝跡群が発見されたこと、中世の瓦が出土したことなど注目すべき成果が得られた。

遺跡の性格を考える上で、まず、遺構群の年代と位置関係をみておきたい。今回発見された道路側溝とみられる溝跡群を北側に延長すると、仰ヶ返り地蔵のある土壇の東辺に至る。このことは仰ヶ返り地蔵の土壇が、中世の道路跡に面した位置にある可能性を示している。仰ヶ返り地蔵尊そのものの年代は特定できないが、土壇の周囲から中世陶磁器や瓦片が採取されていることや、今回発見された溝跡との位置関係から、この土壇が中世まで遡る可能性は否定できない。また、当遺跡の一部である「中ノ墓D遺跡」(宮城県教委:1980)で発見された「台地南縁の人溝遺構」は、幅3.2m、深さ1.0～1.2m、断面形が逆台形の東西方向の溝跡で、現地表面の観察から、その西側の延長が、仰ヶ返り地蔵の土壇の北縁辺で今回発見された溝跡群と直交する位置関係にあることも確認できる。

次に、これらの遺構群の年代や性格を推定できる特徴的な遺物として瓦が注目される。「中ノ墓D遺

跡」の「台地南縁の大溝遺構」からは、凹面がヘラ状の工具によるナデ調整の痕跡を残し、凸面に格子目の痕跡が残り「離れ砂」がみられる中世の瓦が出土している。これまで仰ヶ返り地蔵の土壇の周囲からもこれと同類の中世の瓦が採集されていて、今回の調査で出土した瓦も、摩滅が著しく特徴を識別しにくいものの、これらと同様の瓦とみられ、鎌倉時代後半期の年代が想定される。東北地方では中世の瓦の出土例は極めて稀少であり、宮城県では松島町円福寺跡、仙台市岩切東光寺・洞ノ口遺跡の3遺跡で、当遺跡と同様の瓦が出土しているにすぎない。

当遺跡の瓦が、どこでどのように使用されていたのか明確ではないが、当遺跡を長年にわたって詳細に踏査してきた藤原二郎氏により、中世瓦窯が存在する可能性が高いこと、仰ヶ返り地蔵の土壇付近に瓦を使用した御堂などの寺院関連の施設が存在した可能性が高いことなどの重要な指摘がなされている。今回の調査では、こうした藤原氏の指摘に矛盾しない成果が得られたことになる。

以上のように当遺跡では、仰ヶ返り地蔵のある土壇付近を中心に、中世、鎌倉時代後期頃の遺構群が濃密分布する様相が垣間見られる。これらは、当遺跡の北側に広がる観音沢遺跡や、東側約500mに位置し中世の寺院跡と推定される覚満寺跡などと深く関わる一連の遺跡と推察される。

引用・参考文献

- 高清水町史編纂委員会：1976：『高清水町史』高清水町
早坂春一：1980：「中ノ茎B・C・D遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書③』宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
加藤道男・阿部博志：1980：「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書④』宮城県文化財調査報告書第72集 宮城県教育委員会
覚満寺跡発掘調査団：1999：『覚満寺跡発掘調査概報』宮城考古学第1号 宮城県考古学会

II 高清水城跡

調査要項

高清水城跡

遺跡名：たかしみずじょうあと (宮城県遺跡登録番号44024)

遺跡記号：TA

所在地：宮城県栗原郡高清水町字東館

調査原因：町下水道工事

発掘面積：約10m²

調査期間：平成12年11月13・14日

調査員：櫻田逸子（高清水町史編纂事務局）

古川一明・山田晃弘（宮城県文化財保護課）

II 高清水城跡

1. 調査に至る経過

遺跡の概要

高清水城跡は、天文年間（1532～1554）高泉直堅が城郭としての整備を進め、天正18・19年（1590・1591）の大崎・葛西一揆の際は、伊達政宗の陣所となつた。慶長9年（1604年）には高清水の地が亘理重宗に与えられ、その子宗根が居した。その後、仙台藩領高清水要害として、宝曆7年（1757年）からは石母田興頼の居所となつた。明治6年（1873年）学制施行に伴い石母田家から邸宅の一部が小学校教場として提供され、現在は高清水中学校の敷地となるに至つてゐる。

これまでの調査

高清水城跡は、昭和51年、東北新幹線建設工事に関わる発掘調査がおこなわれ、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見された。この調査地点は城跡の東辺に位置し「東館遺跡」と重複していたため、「東館遺跡」という遺跡名で調査・報告がなされた。この際発見された「堀2・3」は高清水城北側外濠の東端部と考えられている（加藤：1980）。

その後、平成8・9年には高清水中学校の体育館建設工事に関わる発掘調査がおこなわれた。平成8年の確認調査のトレーンチ調査では、濠や主郭内の建物跡柱穴の一部などが確認され、平成9年の事前調査では、中近世の溝跡、井戸跡、土坑、柱穴が発見されている。このうち、馬出とみられる溝跡は15世紀中頃以降の高清水城跡に伴う遺構と推定され、大規模な内外二重の外堀跡は近世の高清水要害に伴うものと考えられた（佐藤：1998）。とくに近世のSD-1堀跡は上幅14.5m、深さ3.2mときわめて大規模なもので、堆積土から水を湛えた濠であったことが確認されている。



第8図 高清水城跡

調査経過と方法

平成12年、城跡北西部の町道で下水道工事がおこなわれることになり、高清水町建設課、町教育委員会、宮城県文化財保護課の三者での協議の結果、掘削面積が1.5mと狭いことから工事立会を実施することになった。

下水道管埋設のための掘削工事立会を行っていたところ、高清水中学校校門前の西側約20mの地点で、現道路面下約1.7mで埋設された木樋が発見された。このため、工事を中断し、木樋がかかる約7mの区間について事前調査をおこなった。調査は、高清水町教育委員会が主体となり、宮城県文化財保護課が担当した。調査の結果、木樋の他、底面に木屑を敷いた暗渠と、底板のみが残る暗渠施設が発見された。

発見された遺構および調査区については、道路センターを基準とする任意の基準線を調査区内に設定し、縮尺1/20の平面図・断面図を作成した。また、遺跡の記録写真は35mm白黒・カラースライドで撮影した。

なお、木樋と、板材の一部については、保存状態がよいことから、取り上げ後その一部を東北歴史博物館で保存処理した。

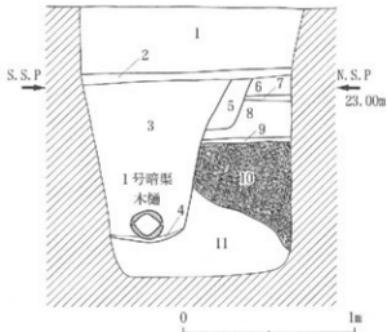


第9図 調査区位置図

2. 調査成果

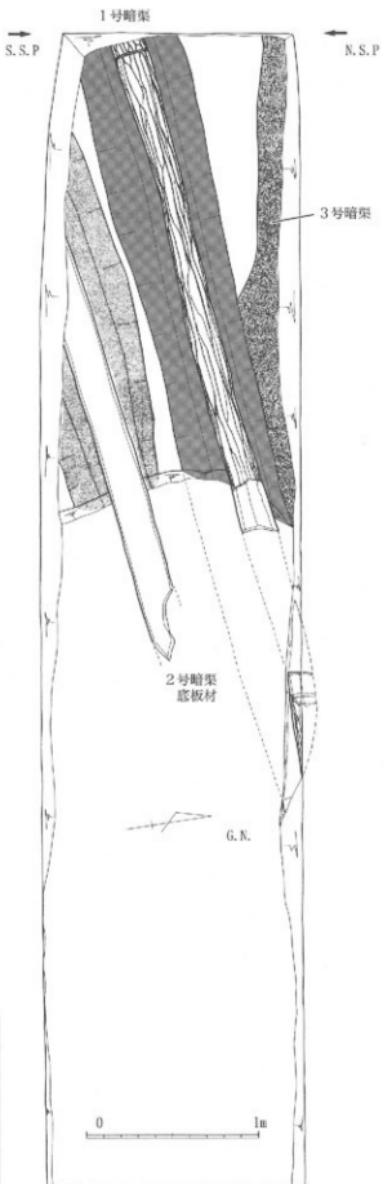
発見された遺構と出土遺物

発見された遺構は、時期の異なる3条の暗渠施設でいずれも東西方向にはば並行して延びている。底面のレベルからみるといずれも西から東へ傾斜しており、西から東へ通水したものと考えられる。ただし、通水部分の構造がそれぞれ異なり、1号暗渠は木樋、2号暗渠は樋の底板とみられる板材が抜き取り溝内に断片的に残るもの、3号暗渠は底面に木屑を敷いて埋め戻したものである。



No	遺構	土色	土性	編号
1	現地概観		鈍石	
2	旧路沿	褐色	IOYH2/1 砂質シルト	
3	1号暗渠底方壁土	灰青褐色	IOYH4/2 砂質シルト	粘土・砂礫含む
4	"	暗褐色	IOYH3/3	"
5	"	にぶい黄褐色	IOYH5/4	"
6	整地層	暗褐色	IOYH3/3 シルト	水質粉合む
7	旧路沿	にぶい黄褐色	IOYH1/3 砂質シルト	小礫含む
8	整地層	暗褐色	IOYH3/3 シルト	水質粉合む
9	旧路沿	にぶい黄褐色	IOYH4/3 砂質シルト	小礫含む
10	3号暗渠底方壁土	灰青褐色	IOYH4/2	"
11	地山	にぶい黄褐色	IOYH5/4	"

第10図 調査区西壁断面図



第11図 調査区平面図

1号暗渠施設

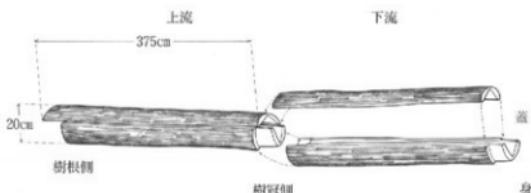
掘り方底面に木樋を埋設し通水した暗渠施設で、2・3号暗渠施設よりも新しい。掘り方の掘込み面は、堅く締まった黒色シルトの路面堆積層（第10図2）の直下である。掘り方の規模は、上幅約1m、路面からの深さ98cmで、断面は逆台形をなす。木樋本体は掘り方底面のほぼ中央に据えられ、粘土・砂礫を含む土（第10図3）で埋め戻されている。木樋は、長さ3.7m、径20cmの樹皮の残るクロマツを何本も連結したものである。樋の構造は、丸太材を縦方向に1/3の位置で割り裂き、薄い方を蓋とし、蓋と身の内部を断面が菱形に割り抜いて通水孔としている。樋の結合方法は、樹根側を西の上流方向に樹冠側を東の下流方向に向け、上流の樋の樹冠側の外表面部分を剥ぎ取り、内削りを入れた下流側の樋の樹根部に挿入し接続している。調査区内では3本分が確認され、さらに北西から南東方向の調査区外に直線的に延びている。出土遺物は無い。

2号暗渠施設

抜き取り溝の底面に板材が残る暗渠施設で、1号暗渠施設よりも古く、3号暗渠施設よりも新しい。抜き取り溝が掘り方の底面まで達していて、その下部に掘り方がわずかに残っていてその底面に、樋の底板とみられる板材が断片的に残存する。抜き取り溝の掘り込み面は、堅く締まった黄褐色の砂質シルトの路面堆積層（第10図7）直下とみられる。抜き取り溝跡の規模は、上幅が100cm以上、堀り込み面からの深さ110cmで、断面は逆台形をなす。残存する板材は、掘り方底面のほぼ中央に据えられており、粘土・砂礫を含む土で埋め戻されている。通水部は破壊されていて本来の構造は不明であるが、掘り方底面に残存する板材は、長さ2.6m以上、幅20cm、厚さ3cmで、両側辺に60cm前後の間隔で鉄製の角釘が下面から打ち込まれている。この板材は樋の底板と推定され、本来は両側に釘で側板が留められ、上面に蓋をして箱形の暗渠の通水部を構成していたものと推定される。調査区内では1本分が確認され、さらに北西から南東方向の調査区外に直線的に延びている。出土遺物は無い。

3号暗渠施設

掘り方底面に小枝や木屑を埋設し通水した暗渠施設で、1・2号暗渠施設よりも古い。掘り方の掘込み面は、堅く締まった黒色シルトの路面堆積層（第10図9）の直下である。掘り方の規模は、上幅100cm以上、路面からの深さ約70cmで、断面は逆台形をなす。掘り方底面の木屑は厚さ5cm前後で、上部は粘土・砂礫を含む土（第10図10）で埋め戻されている。掘り方は北西から南東方向の調査区外に延びているが、わずかに蛇行し、不規則な出入りがある。出土遺物は無い。



第12図 木樋連結模式図

3.まとめ

発見された3条の暗渠施設は、出土遺物が無く、年代を特定することはできない。しかし、発見された位置・方向などからみて、いずれも近世の高清水要害に関わる構造と推定される。したがって、以下では古絵図などから読みとれる要害の施設配置と調査区の位置関係をもとに、今回発見された施設についてまとめてみたい。

貞享五年（1688）「栗原郡高清水要害屋敷惣絵図」でみると、今回の調査地点は、要害の大手門の西側に位置している。この場所は大手前の道路敷にあたっていて、南西には南北方向の濠の北端が、北東には「コ」字状の壕の南東端が近接している（第8図）。発見された構造は、その位置と方向、構造、底面のレベルなどからみて、いずれも、南西の南北方向の濠の北端から、北東の「コ」字状の壕の南東端に向けて濠内の水が流れるようにした暗渠施設であったと考えられる。これら3条の暗渠施設は、それぞれ時期の異なる路面から掘り込まれていて、路面の改修に伴って、暗渠施設の改修もおこなわれたものとみられる。

町名が示すように、この地域は地下水位が高く、要害の外堀は給水施設なしでも新鮮な湧水を常に湛えた美しい濠であった。高清水中学校体育館建設に伴う調査でも、要害の外堀とみられるSD-I廻跡は水を湛えた濠であったことが確認されている。しかし、絵図にみえる濠は、各所で道路によって寸断されているため、なんらかの排水施設が必要であったと推察される。今回発見されたような暗渠施設は、濠の途切れた部分の道路下の各所に敷設されていたものと考えられる。

引用・参考文献

- 高清水町史編纂委員会：1976：『高清水町史』 高清水町
加藤道男：1980：『東北新幹線関係遺跡調査報告書③』 宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
高橋守克：1980：『新庄館跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書②』 宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
早坂春一：1980：『中ノ塁B・C・D遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書③』 宮城県文化財調査報告書第65集 宮城県教育委員会
加藤道男・阿部博志：1980：『観音沢遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書④』 宮城県文化財調査報告書第72集 宮城県教育委員会
千葉宗久：1981：『松ノ木沢A遺跡・向野A遺跡』『東北地建バイパス関係遺跡調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第76集 宮城県教育委員会
兵藤博行ほか：1994：『新高清水風土記 石母田家と高清水の歴史』 高清水町
佐藤貴志：1998：『高清水城跡』 高清水町文化財調査報告書第1集 高清水町教育委員会
覚満寺跡発掘調査会：1999：『覚満寺跡発掘調査概報』 宮城考古学第1号 宮城県考古学会

写 真 図 版



仰ヶ返り地蔵（奥の覆屋内）と
調査区（南より）



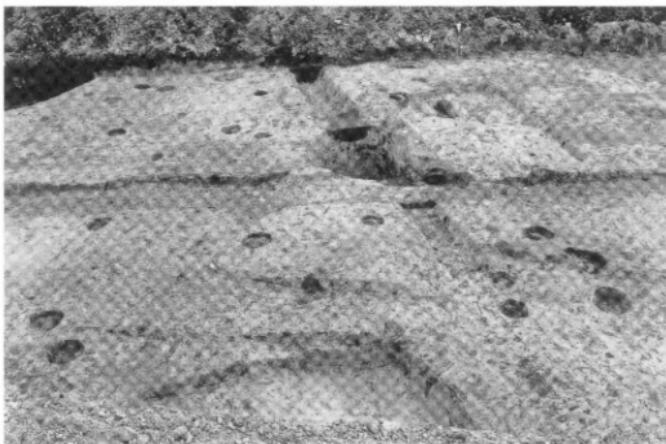
調査区全景（南東より）



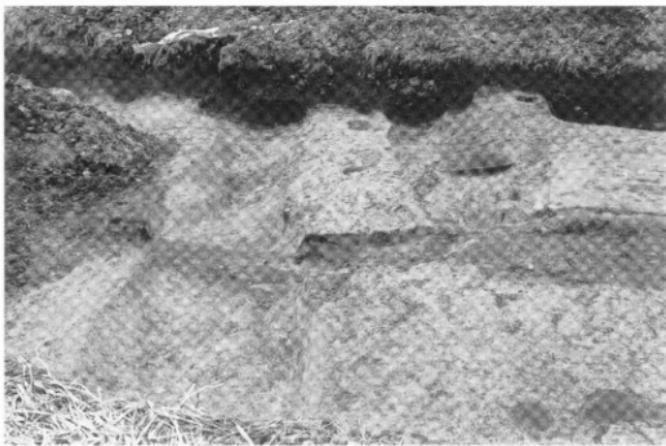
調査区全景（西より）

仰ヶ返り地蔵前遺跡

写真図版 1



据立柱建物跡（南より）

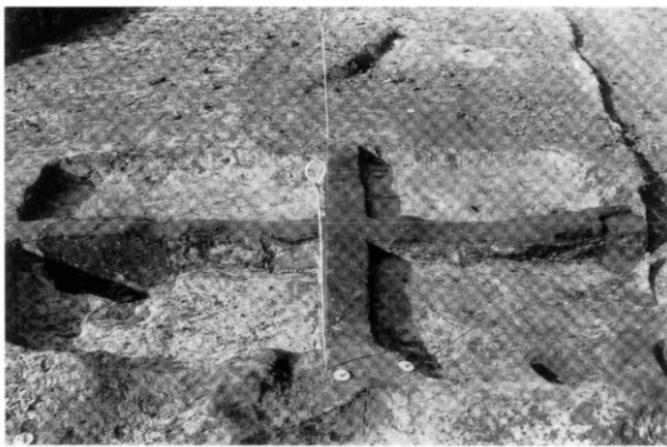


SD04・05・06・07
溝跡（北より）

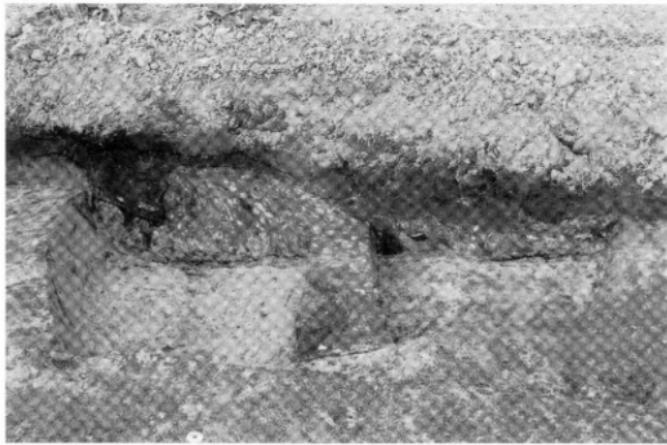


調査風景

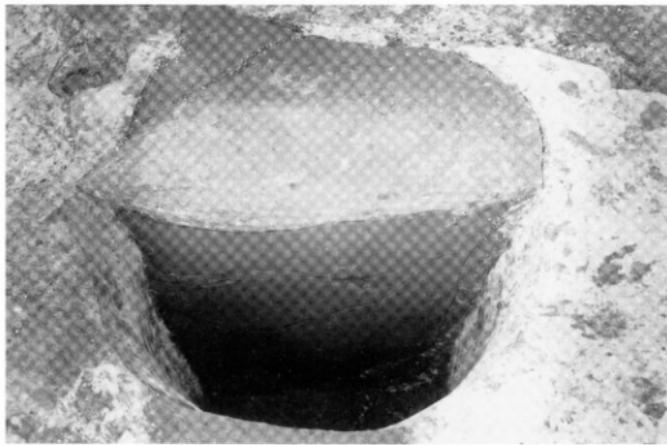
仰ヶ返り地蔵前遺跡



SK11堅穴遺構（東より）



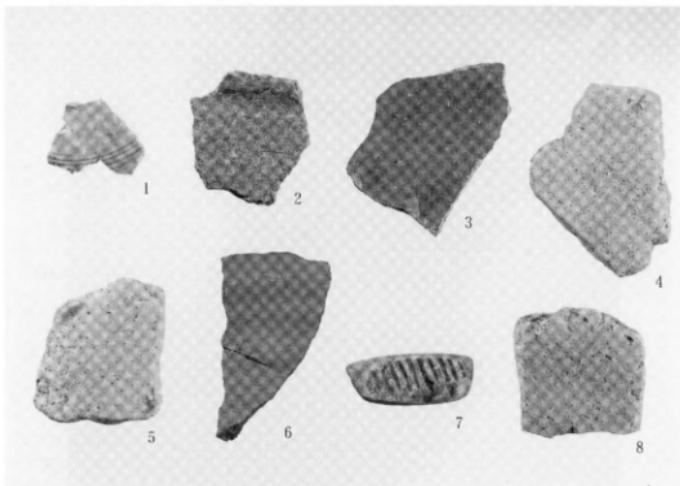
SK09堅穴遺構（南より）



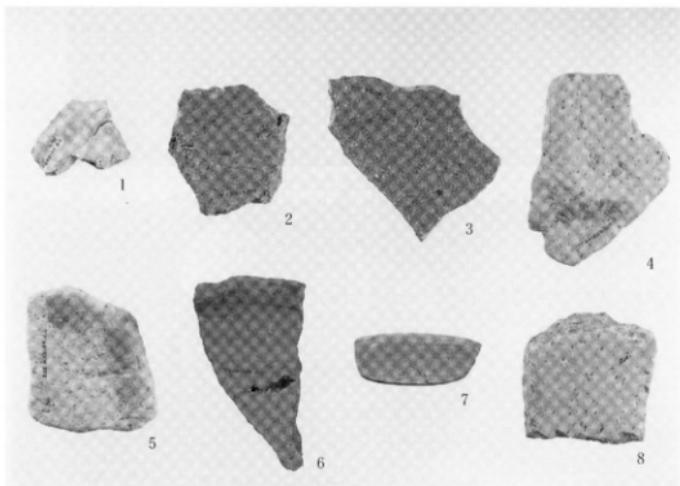
SE10井戸跡（南より）

仰ヶ返り地蔵前遺跡

写真図版 3

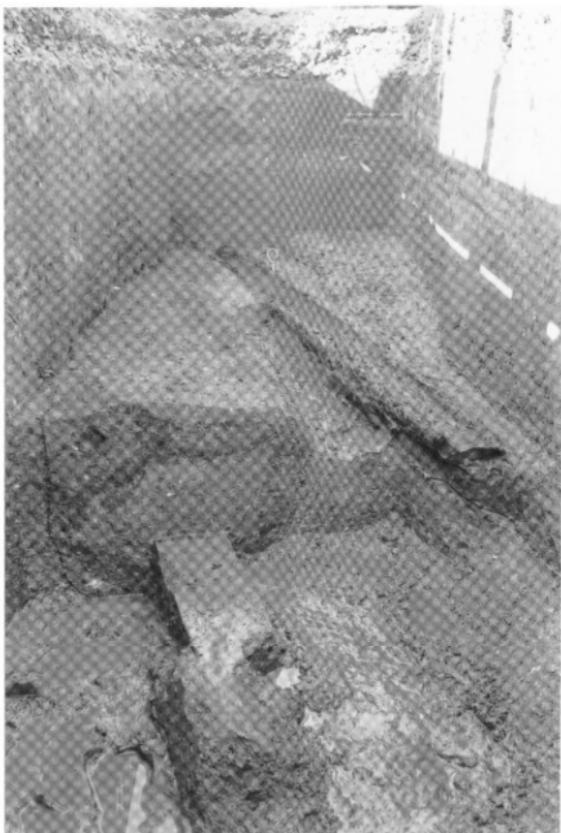


出土遺物（表）



出土遺物（裏）

仰ヶ返り地蔵前遺跡



調査区全景（東より）



木礫検出状況（北より）

報告書抄録

ふりがな	のけがえりじぞうまえいせき・たかしみずじょうあと
書名	仰ヶ返り地蔵前遺跡・高清水城跡
調書名	
卷次	
シリーズ名	高清水町文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	古川一明
編集機関	高清水町教育委員会
所在地	〒987-2133 宮城県栗原郡高清水町字桜丁5 TEL 0228-58-2204
発行年月日	西暦2002年3月31日

ふりがな所 取遺跡名	ふりがな所 在地	コ一ド		北緯 °.′.″	東經 °.′.″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のけがえり じぞうまえいせき 地蔵前遺跡	宮城県 栗原郡 高清水町 字仰ヶ返り	045241	44005	38度 38分 18秒	141度 00分 45秒	2000.11.20~12.08	約300	町道改良 拡幅工事
かかし 高清水城跡	高清水町 字東館	045241	44024	38度 39分 10秒	141度 01分 00秒	2000.11.13~11.14	約10	町下水道 敷設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
仰ヶ返り 地蔵前遺跡	集落跡	鎌倉	道路側溝 堅穴遺構 掘立柱建物跡 井戸跡	中世陶器・瓦・砾石	奥大道と推定される 道路側溝			
高清水城跡	城館跡	江戸	木樋 (暗渠排水施設)	木樋	高清水要害の外濠を 繋ぐ配水施設			

高清水町文化財調査報告書第3集

**仰ヶ返り地蔵前遺跡
高清水城跡**

平成14年3月22日印刷

平成14年3月25日発行

発行 高清水町教育委員会
〒987-2133 萩原郡高清水町字桜丁5
電話 0228-58-2204

印刷 今野印刷株式会社
〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町4-5

